

	一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科 同窓会報	発行所	一般社団法人名古屋大学農学部・ 生命農学研究科同窓会 名古屋市千種区不老町 http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/
	セコイア通信	編集人	藤田祐一・青木 弾
		発行人	福田秀志
		印刷所	株式会社 クイックス

未来につながる生命農学の学びと研究

名古屋大学農学部長・大学院生命農学研究科長 中 園 幹 生



名古屋大学農学部・大学院生命農学研究科同窓会会員の皆様におかれましては、日頃より本学部・研究科の教育・研究活動に対し、格別のご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。また、この春に卒業・修了を迎えられた皆様に、心よりお祝いを申し上げます。皆様がそれぞれの道において力を発揮され、今後ますます活躍されることを願っております。

名古屋大学農学部（1951年創立）および名古屋大学大学院生命農学研究科（1953年創立）は、70年以上にわたり、食・環境・健康を基盤とする学術と人材育成を通じて、社会に貢献してまいりました。これまでに多くの卒業生・修了生を送り出し、国内外の産業界、行政、教育・研究機関など、さまざまな分野で活躍されていることは、本学部・研究科の大きな誇りであります。

現在、名古屋大学では、「世界と伍する研究大学」の実現に向け、学部から大学院博士後期課程までを見据えた一貫的な人材育成と、国際的に評価される研究成果の創出を両立させる改革が進められております。さらに、国立大学法人東海国立大学機構のもと、名古屋大学と岐阜大学が連携し、地域社会や産業界とともに発展する大学の新たな姿を築こうとしております。

このような環境の中で、農学部・大学院生命農学研究科には、生命農学分野における「知の拠点」として、より大きな役割が求められております。食・環境・健康に関する地球規模の課題に対し、学術的知見に基づく解決策を提示し、その成果を社会に還元していくことが、私たちの重要な使命であります。本学部・研究科では、その使命を果たすため、国際的な教育・研究ネットワークの強化に取り組んでおります。学生が海外で学び、多様な価値観や研究文化に触れる機会を拡充するとともに、若手教員が国際共同研究に参画できる環境整備を進めております。これらの取り組みを通じて、生命農学分野における教育・研究の質の向上と、国際的な存在感の強化を目指しております。

一方で、これらの取り組みを継続し、さらに発展させていくためには、安定した財政的基盤の確立が不可

欠であります。近年、光熱費の高騰などに起因する運営経費の増加により、部局の財政状況は深刻さを増しており、従来の予算措置のみでは、新たな教育・研究の展開を十分に支えることが困難となっております。

そのような状況にあっても、本学部・研究科では、学生の教育環境の充実、国際的に活躍できる人材育成、若手教員による国際共同研究の推進といった将来を見据えた取り組みを、着実に進めてまいりたいと考えております。そのためには、同窓会会員の皆様をはじめとする関係各位からのご支援が、これまで以上に重要となっております。

本学部・研究科では、「名古屋大学農学部・生命農学研究科教育研究基金」を通じてお寄せいただいたご寄附を、学生の国際的な学修・研究活動の支援、教育・研究環境の整備などに活用させていただいております。本基金の趣旨にご賛同いただけましたら、ぜひともご寄附をご検討賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

現在、募金キャンペーンを実施しておりますので、詳細につきましては、名古屋大学農学部・大学院生命農学研究科のホームページにてご確認ください。また、以下のURL または QR コードからアクセスしていただくか、「名大農学キャンペーン」と検索していただくことで、寄附の手順をご覧いただけます。

《名古屋大学農学部・生命農学研究科教育研究基金（特定基金）募金キャンペーン詳細》

<https://www.agr.nagoya-u.ac.jp/contribution/kifu002.html>

今後も、同窓会会員の皆様が築いてこられた歴史と伝統を大切に受け継ぎながら、新たな教育・研究活動に挑戦し、さらなる発展を目指してまいります。引き続き、変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、何卒よろしく申し上げます。



キャンペーン
QRコード

「永久会員」への勧め～同窓会は会員サービスの向上を進めています～

名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会 会長 福田 秀志



同窓生の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。また、農学部・生命農学研究科を今年度ご卒業、ご修了された皆様方には、心よりお祝い申し上げますとともに、晴れて同窓会員なられた皆様を、同窓生1万人を代表して歓迎いたします。

2025年10月18日に開催されました同窓会総会において、同窓会長に新たに就任いたしました福田秀志でございます。1992年に林学科を卒業、1997年に林学専攻博士後期課程を修了し、現在は愛知県内の私立大学に勤務しております。また副会長には、産業界で活躍されている、(株)ブルボン代表取締役会長の吉田康様に就任して頂きました。これは、同窓会と産業界で活躍する同窓生との連携を強めてくための一歩と考えています。

本同窓会は、2022年10月15日に一般社団法人化しました。一般社団法人化後の同窓会は、意思決定を行う「理事会」と業務執行を行う「幹事会」の両輪で運営しております。業務の多くを農学部・生命農学研究科の現役の先生方からなる「卒業生との連携委員会」の先生方が担ってくださっており、このことが安定的な活動につながっています。名古屋大学農学部・生命農学研究科との間では、「連携協力に関する覚書」も締結しております。さらに、農学部の執行部の先生方と定期的に懇談の機会をもっています。

名古屋大学農学部からは、約10,000名の学士、6,000名の修士および2,000名の博士がこれまでに巣立ち、様々な産業分野、行政、アカデミア等で活躍されています。例えば、2025年には、1985年に農芸化学分野を修了された水戸信彰が技術系としては80年ぶりに住友化学㈱の代表取締役社長に、1988年に林学科を卒業されました小坂善太郎氏が林野庁長官に就任されました。同窓会としても卒業生・修了生の国内外での活躍

を把握し、これを農学部・生命農学研究科の研究・教育にフィードバックする役割が強く望まれています。

こうした役割を同窓会が果たしていくためには、安定した財政基盤の確立が必要不可欠です。そこで、2年間にわたり「緊急のお願い」をさせていただいたところ、多くの皆様がそれ応えて、永年会費を納入してくださいました。今後は、多くの同窓生に積極的に永年会費を納めて頂くために、会員サービスの向上を図る必要があると考えています。現在議論されていることは、現役の学生・大学院生に対しては、大学と連携を取りながら、産業界でご活躍されている同窓生と同窓会が連携することにより就職等の支援ができないかというものです。このことは、大学側、産業界双方にメリットがあると同窓会としては考えています。また、同窓会の主なイベントは、ホームカミングデーと卒業式イベントですが、卒業式イベントの企画を卒業・修了生により満足して頂くもの（豪華）にしていくとともに、ホームカミングデーにはより多くの同窓生が参加したくなる企画を検討していきたいと考えています。

同窓会は、その他にも、セコイア通信の発行、卒業関連諸行事、入学関連諸行事、ホームカミングデーに合わせた「卒業・修了50周年記念祝賀会」、総会、講演会を行うほか、関東支部、関西支部も積極的に活動しております。行事の詳細は、本セコイア通信に掲載しておりますほか、同窓会ホームページでも随時ご案内をしております。

同窓生の皆様におかれましては、これまで以上に同窓会活動にご参加いただき、卒業生の立場で農学部・生命農学研究科を盛り上げて頂ければと思います。

名古屋大学での10年半の農学部生活を終わろうとして

植物生産科学専攻（作物科学） 近藤 始彦



2026年3月をもちまして生命農学研究科を定年退職させていただくこととなります。10年半前の着任時の教授会での挨拶で、担当する作物科学は多面的な分野のため多くの方々にお世話になるのでよろしくとお伝えしたように記憶しておりますが、そのときの想定以上に本当に沢山の皆様にお世話になりました。これまでの名大での生活の雑感を拙いながら述べさせていただきます。

育む：農学から社会へ 比較的職員の平均年齢の高い職場に長く在籍しておりましたため、名大に着任当初は若者の海にうかぶ孤島のような気分でした。毎年研究室だけでも数名の若者たちがはいつてきてまた巣立っていく速さには戸惑いましたが、そのうちにそのパワーをいただくようになりました。農学部を志望する学生さんの動機には何等か食料・環境問題の解決に役立ちたいという貢献心と純粋に生物が好きという好奇心があるかと思います。そのバランスは人色々かと思いますが、名大には前者が強い人が多いように感じました。今の社会で生かせる農学研究の経験をしてもらえる環境をつくれたかどうかはなほだ自信はありませんが、このような名大生が卒業後に社会で活躍されるのを見ることができるとは教員の最大の楽しみと感じます。

創る：先を見越した研究 もとより応用研究である農学では大学と他の研究機関との役割の違いは比較的小さいように思いますが、その中でもやはり先をみた研究が大学に期待されているかと思います。作物分野では世界の人口増加にみあう食糧増産とその生産の持続

性の両立については、まだ正解のみえない長期的な課題かと思います。肥料、土壌など資源問題、温暖化対策、日本の食料自給率向上など課題は山積しています。私自身はイネと水田を持続的食料生産の一手段として活用する道を模索をしてみましたが、今後の多面的な取り組みの必要性を痛感しております。日本の農業の厳しい現状からは何もお役に立てなかった無力感とアフリカやアジアのイネ生産の目覚ましい進展ぶりをみての嬉しい気持ちとのない交ぜが実感です。

つなぐ：地道な活動の継続 研究も教育もつなぐことが大学の大きな役割と感じるようになりました。人を介してそして論文を介して次世代につなぐ。学会活動もしかりです。地道に長期的な課題に挑み続ける研究環境が今後も続くことを願っております。

名古屋大学農学部は多様な分野で最先端の研究をされている方に接せられる一方で大きすぎず、おおよそお互いの顔がみれるアットホーム感を両立している居心地のよい環境でした。サポート部門の皆様の強力なご協力と暖かいご配慮には本当に感謝しております。全学技術センターの皆様には暑い中でのフィールド管理、また機器分析など大変にお世話になりました。事務部の皆様にはいつも親身にご相談にのっていただきました。改めてお礼申し上げます。農学部、生命農学研究科の益々のご発展と皆様のご健康を祈念して筆をおかせていただきます。ありがとうございました。

日本の農業・農村の変化の中の研究人生

植物生産科学専攻（食料経済学） 徳田 博美



私が生まれたのは1960年で、翌年に旧農業基本法が制定されました。この法律は、日本が経済復興から高度経済成長に進む下での農業の転換を象徴するものです。私が生まれたのは東京郊外の新興住宅地でした。幼いころは家の前は畑でしたが、いつの間にか放置され、子供の遊び場となり、さらに宅地整備され、住宅に変わっていくという農業衰退の縮図を目の当たりにしてきました。

私が大学を卒業し、農業経済の研究者をスタートしたのは1983年ですが、その2年後の1985年にはプラザ合意による急激な円高が進み、農産物輸入が急増して、日本農業は経済全体の中での農業の比重が縮小する相対的縮小から農産物産出額自体が減少する絶対的縮小へと状況はあっという間に厳しくなってきました。

日本農業は、高度経済成長期から農地の減少、兼業化の進展、農村の過疎化など厳しい状況が指摘され、その後は耕作放棄地の拡大、農家の高齢化・減少、限界集落の増加など、さらに深刻化していましたが、これまで何とか持ちこたえてきました。しかし、私の大学退職を前にして、これまで生産過剰に苦しんできたコメの供給不足による高騰に象徴されるような存亡の危機とも言える状況となっています。

このようにみえてくると、私の農業経済研究者としての歩みは、日本農業の変化（衰退）とともにあったと言えます。私の研究は、日本農業の現場での調査に基づく実証的研究を中心としていたので、農業の変化が研究対象であったとも言えます。

農業経済学の研究に求められているのは、農業の発展や食料の安定供給に貢献することであると言えるので、この日本農業の変化（衰退）には忸怩たる思いがあります。同時に変化する農業の現場を見続けた研究人生を振り返る中で思い浮かぶことがあります。人間

は世の中は常に変化していることは分かっている、自らが関わっている現場で現に起きていることに目を奪われ、それはいつまでも変わらないものと思いがちです。現場を丹念に調べていけば、変化の兆候が潜んでいます、見落としてしまいがちです。現在のコメ高騰問題も、水田農業の現場などでは、その兆候は現れていましたが、行政はそれを無視し、コメは過剰という認識を変えられなかったことも一因となっています。

研究人生の後半では、アジアからの留学生と関わることが増え、彼らの母国の農業の現場を訪れることも多くありました。彼らの母国の多くは高度経済成長途上にあり、それにともなった農業・農村は大きく変貌することが予想されます。しかし、留学生たちは、現在の農業・農村の実態（貧困、過剰人口、非効率な生産など）に関心が集中し、これからの変化についてはあまり関心を示していないように感じてきました。確かに彼らの母国の農業・農村が抱える問題は深刻であり、それを解決することは最優先の課題ですが、長期的な視野から変化の先も考えることも必要であると感じてきました。その際、水田農業を基盤としているという点では日本と共通しており、これまで日本農業が経験してきた変化の経験を共有することは有益であると考えます。

日本の農業は存亡の危機にあり、また世界の食料問題は深刻化することが危惧される中で本研究科に対する期待は大きくなっています。その期待に応えた研究を進める上でも、食料・農業の現場は現在のままでなく、変化していくこと、その変化の兆候は現場に潜んでいることを踏まえておくことは大切です。

令和8年度名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会 代議員会、総会、講演会、懇親会のご案内

名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会（セコイア会）では、名古屋大学ホームカミングデイに合わせて代議員会、総会、講演会、懇親会を開催いたします。詳細は、同窓会ホームページ（<https://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/>）にてご案内いたしますのでご確認ください。

○代議員会

対象：代議員（対象の代議員の皆様には別途ご案内を申し上げます）
日時：2026年10月17日（土） 12：30-13：45（予定）
場所：農学部 B 館第12講義室

○総会

対象：同窓会会員であればどなたでもご参加いただけます
（ただし議決権を有するのは代議員のみです）
日時：2026年10月17日（土） 14：00-14：30（予定）
場所：農学部 B 館第12講義室

○卒業50周年記念祝賀会

対象：学士・修士・博士卒業・修了50周年の方（対象の皆様には別途ご案内を申し上げます）
日時：2026年10月17日（土） 12：00-13：45（予定）
場所：農学部大会議室

○講演会

対象：どなたでもご参加いただけます（参加費無料）
日時：2026年10月17日（土） 15：00-16：15（予定）
場所：農学部 B 館第12講義室
講師：村田 聡子（むらた さとこ）氏
キリンホールディングス（株）経営企画部主査
平成20年 大学院生命農学研究科 生物機構・機能科学専攻（生物化学研究分野）
博士前期課程修了

山口 悟（やまぐち さとる）氏
豊田通商株式会社 豊通ファッションエクスプレス株式会社出向
ブランドライセンス部 部長
平成20年 大学院生命農学研究科 応用分子生命科学専攻（食品機能化学研究分野）
博士前期課程修了

○交流会

対象：同窓会会員であればどなたでもご参加いただけます
日時：2026年10月17日（土） 16：30-18：00（予定）
場所：農学部講義棟第7講義室

連絡先：農学部・生命農学研究科同窓会 幹事会 稲垣哲也
メールアドレス：inatetsu@agr.nagoya-u.ac.jp

同窓会の開催について

同日に個人的に同窓会を企画される場合、農学部・生命農学研究科同窓会の懇親会を1次会としてご利用いただくことができます。同窓会事務局（dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp）まで事前にご連絡下さい。必要に応じて、同窓会ホームページを掲示板としてご利用いただくこともできます。

昭和51年卒業生および修了生（満期退学）の卒業50周年記念祝賀会の案内

昭和51年卒業生および修了生（満期退学）の50周年記念祝賀会は、名古屋大学ホームカミングデーに合わせて2026年10月17日（土）に開催する予定です。後日、祝賀会へのご招待状を送付させていただきます。万障お繰り合わせの上ご出席ください。祝賀会に関する情報は、8月以降に農学部同窓会ホームページ（<https://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/>）にも掲載いたしますので、ご確認ください。

《代議員選挙の公示》

本会定款第12条ならびに代議員選出規則に基づき、2026・2027年度代議員選挙を下記のとおり行います。

記

- 1. 代議員の候補人数と任期
 - ・108名（詳しくは代議員選出規則をご参照ください）
 - ・任期2026年定時総会から2027年定時総会直前までの2年間
- 2. 選挙日程
 - ・投票期間2026年4月1日(水) から7月31日(金) まで
 - ・開 票2026年8月3日(月) (予定)

- 3. 選挙権
 - 選挙の行われる年（以下、「選挙年」という）4月1日現在の本会の正会員が有する。
- 4. 投票方法
 - 所定の形式に基づいたWEB入力での不信任投票を行う。
 - 投票を行い際には選挙管理委員会まで投票を行う旨を連絡し、返送されるwebアドレスから投票行う (inatetsu@agr.nagoya-u.ac.jp)

以上

2026年3月29日

一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会
選挙管理委員会委員長 稲垣哲也

2026・2027年度代議員候補者

(カッコ内は最終卒業年(予定も含む))

1	小木曾 正敏 (1968)	16	藤井 潔 (1979)	31	児玉 秀典 (1987)	46	山田 邦夫 (1994)	61	Mohamed Oubihi (2000)	76	高木 直人 (2010)	91	岡 大椰 (2019)	106	根橋 愛美 (2025)
2	並河 鷹夫 (1968)	17	安川 拓次 (1979)	32	平野 淳一 (1988)	47	福田 秀志 (1994)	62	川合 康洋 (2000)	77	橋村 侑磨 (2011)	92	宮田 苑加 (2019)	107	中川 万由子 (2025)
3	阿部 芳男 (1968)	18	間瀬 英男 (1979)	33	熊澤 茂則 (1988)	48	高須 昭則 (1995)	63	笥 明洋 (2001)	78	尾頭 信昌 (2011)	93	中川 貴雄 (2020)	108	稲澤 杏実 (2025)
4	山木 昭平 (1970)	19	岩崎 行玄 (1980)	34	伊神 裕司 (1989)	49	平野 恭弘 (1995)	64	浅井 俊雅 (2002)	79	山川 陽平 (2011)	94	市野 真裕美 (2021)		
5	加藤 壽郎 (1970)	20	菅沼 教生 (1980)	35	大久保 武 (1989)	50	佐光 佳弘 (1995)	65	吉田 宗平 (2003)	80	稲垣 哲也 (2011)	95	勝田 哲史 (2021)		
6	宗宮 弘明 (1971)	21	石川 靖文 (1981)	36	落合 公也 (1989)	51	氏田 稔 (1995)	66	山田 貴亮 (2004)	81	佐野 健志 (2012)	96	水谷 友香 (2021)		
7	深谷 雅博 (1972)	22	福與 修 (1982)	37	和泉 秀彦 (1989)	52	平泉 智子 (1996)	67	柴田 友美子 (2004)	82	小川 拓哉 (2012)	97	原屋 正龍 (2022)		
8	野間 順一 (1972)	23	木野 勝敏 (1982)	38	長谷川 稔 (1990)	53	間崎 剛 (1997)	68	服部 洋子 (2005)	83	大井 崇生 (2012)	98	柵木 香奈穂 (2022)		
9	横越 英彦 (1972)	24	荒川 みはる (1984)	39	井野 右文 (1990)	54	河原崎 泰昌 (1997)	69	鈴木 孝征 (2005)	84	都築 知佳 (2013)	99	柏田 星南 (2022)		
10	西村 幹夫 (1973)	25	小川 一治 (1984)	40	福島 和彦 (1990)	55	入山 朋之 (1998)	70	新城 明久 (2006)	85	柴田 晃秀 (2016)	100	村上 光 (2023)		
11	片山 正人 (1975)	26	森上 敦 (1984)	41	竹島 喜芳 (1991)	56	榑原 岳史 (1998)	71	玉木 一郎 (2006)	86	澤田 光希 (2017)	101	浅原 南 (2023)		
12	駒田 肇 (1975)	27	吉木 淳 (1985)	42	岩崎 雄吾 (1991)	57	近松 豪 (1998)	72	野口 祐司 (2007)	87	岸 健太 (2018)	102	加藤 琴美 (2024)		
13	裏地 達哉 (1977)	28	二村 幹雄 (1985)	43	保坂 正春 (1991)	58	犬飼 義明 (1998)	73	伴 佳典 (2007)	88	小島 瑛里奈 (2018)	103	松尾 百華 (2024)		
14	小野 珠乙 (1977)	29	水上 優子 (1987)	44	武田 信一 (1993)	59	中西 洋一 (1999)	74	横井 翔 (2009)	89	原田 美弥子 (2018)	104	奥田 啓介 (2024)		
15	小川 雄二 (1978)	30	中園 竜一 (1987)	45	朴 熙万 (1993)	60	中川 由生 (1999)	75	落合 正樹 (2010)	90	藍場 将司 (2018)	105	石川 峻遥 (2024)		

卒業年は名簿をもとに記載しております。卒業年等が誤っている場合は大変申し訳ありませんが、inatetsu@agr.nagoya-u.ac.jp までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会代議員選出規則

第1条 (目的)

この規則は、この法人の定款第12条の規定に基づき、代議員の選出・代議員選挙に関し必要な事項を定めることを目的とする。

第2条 (選出方法)

代議員は、正会員の中からおおむね各卒業年度の各学科又は各専攻につき1名の割合で会員の代議員選挙により選出する。

第3条 (選挙権及び候補人)

- 1 代議員選挙の選挙権は、選挙の行われる年（以下、「選挙年」という）4月1日現在の本会の正会員が有する。
- 2 前期までの代議員を代議員選挙の候補人とする。ただし第11条・第12条に示す通り、代議員の辞任・欠員が生じた場合は推薦後任者を代わりの候補人とする。
- 3 前期までの代議員に加え、前回の選挙から新たに正会員になった会員の中からおおむね各卒業年度の各学科又は各専攻につき1名の割合で候補人を選出する。この候補人は新規に正会員となった会員の互選によって選出する。

第4条 (選挙管理委員会)

この規則による選挙の管理執行に関する事務は、本会選挙管理委員会（以下、「委員会」という）委員及び本会事務局職員が行う。

第5条 (選挙の公示)

選挙の公示は、選挙人、投票日または投票期間、投票場所または投票方法、投票に関する注意事項等を内容とし、選挙年3月にこの法人の機関誌（以下「セコイア通信」という）及びホームページにて行うものとする。

第6条 (選挙期日)

選挙期日は、前任者の任期満了年の7月末日までとする。

第7条 (投票)

- 1 選挙方式は不信任投票とする。
- 2 投票はあらかじめ委員会が定めた所定の形式に基づいたweb入力、または所定の形式の投票用紙を用いた郵送で行う。
- 3 投票は、無記名投票とする。

第8条 (開票)

- 1 委員会は、選挙の公正性を確保するため、選挙期日までに、正会員の中から2名以上の開票立会人を指名する。
- 2 開票は、開票立会人の立会いの下に、選挙終了後直ちに行わなければならない。

第9条 (代議員の当選人の決定)

- 1 代議員の当選の決定に当たっては、不信任数が選挙権を有する会員の総数の半数未満であったものを当選人とする。
- 2 当選人が決定したときには、委員会は当選人に当選の旨を通知し、ホームページで公表しなければならない。

第10条 (異議の申立て)

選挙の効力に関して異議のある選挙人及び候補人は、選挙結果発表日から14日以内に、文書で選挙管理委員会に対して異議を申し立てることができる。

第11条 (代議員の辞任)

- 1 代議員が辞任する場合は、同窓会ホームページ掲載の代議員辞任願に必要事項を記入の上理事会に提出し、理事会の審議によってこれを認める。
- 2 代議員辞任願には、原則として代議員の同年・同学科（もしくは同専攻）卒業の推薦後任者を記入することとする。
- 3 代議員本人によって推薦後任者を選定できない場合、この選定は理事会が行う。推薦後任者は原則として辞任する代議員と同年・同学科（もしくは同専攻）卒業の正会員から選出する。
- 4 (諸般の理由により) 理事会による推薦後任者の選定が難しい場合は、当該代議員を欠員のままとする。
- 5 代議員は辞任後においても後任者が選出されるまではその職務を行わなければならない。
- 6 推薦後任者は推薦後最初に行われる代議員選挙の代議員候補者となる。

第12条 (代議員の欠員)

- 1 (諸般の理由により) 代議員に欠員が生じた場合には、理事会が推薦後任者を選定する。
- 2 (諸般の理由により) 理事会による推薦後任者の選定が難しい場合は、当該代議員を欠員のままとする。

第13条 (選挙事務)

選挙に関する事務は、本会の事務局において行う。

第14条 (規則の変更)

この規則は、社員総会の議決によって変更することができる。

附則

- 1 2022年9月1日から2024年10月の総会終了時までの代議員には、旧同窓会の2022年8月31日現在の評議員のうち代議員就任の承諾を得たものが就任する。
- 2 この規則は、2022年8月29日より実施する。
- 2 この規則は、2024年1月30日より実施する。

卒業生の言葉

誠実さと愚直さを武器に

生物環境科学科 森林化学研究室 森上 葉奈

「科学の力で環境問題に貢献したい」という真っ直ぐな志を抱き、名古屋大学の門を叩いてから早いもので四年の歳月が過ぎました。入学当初、私は研究者という存在を自分とは遠い存在であるように感じていましたが、大学の講義を受けたり、最先端で研究を行う先生方の実習に参加させていただいたりするなかで、その認識は刷新されていきました。それは、研究の現場にあるのは、決してキラキラした瞬間ばかりではなく、正解のない問いに対して答えが出ないまま進み続ける、泥臭い試行錯誤の連続であるという気付きです。

その過酷さを特に痛感したのは、卒業研究として自分自身で初めて研究を担うようになった四年生の一年間でした。理論通りに観測したい現象が起きず、進まない進捗に焦燥感を感じる日々が続きました。現象の鍵となる銀粒子が正しく付着しているかを確認するため、走査電子顕微鏡(SEM)での構造観察にも粘り強く取り組みました。数日間、帰宅後も反省点を考えながら装置のピント合わせに心血を注いだ結果、指導教官から「この装置でここまで見えたならいい」との言葉をいただくことができました。研究が難航する中でも、泥臭く積み重ねた執念こそが確かな一歩に繋がるのだと確信した、忘れられない経験です。

私の根底には、ソクラテスが示した「善く生きる」という哲学があります。それは研究において、不都合なデータも隠さず正直に開示する誠実さとして現れました。たとえ効率が悪く見えても、自分の思い込みを疑い、事実を重んじる。その姿勢こそが科学の本質であり、遠い未来において社会にも自分にも必ず善い方へ作用すると信じています。

私は決して天才ではありません。だからこそ、これからも誠実さと愚直さを忘れず、チームの一員として世界の役に立つ開発に挑み続けたいと思います。未熟な私を導いてくださった先生方や先輩方、共に歩んだ同期、そして支えてくれた家族、すべての幸運に心からの感謝を捧げます。



農学の奥深さを学んだ4年間

資源生物科学科 情報農学研究室 石原 彩香

4年間の大学生活で一番心に残っていることは、知的好奇心を刺激するような講義の数々です。毎日、毎授業、夢中になってメモを取りながら講義を受けていました。

生物化学、遺伝学、生態学、植物生理学、作物科学など、農業に関わる様々な分野を学びましたが、どの講義も非常に興味深かったです。早起きで眠気に襲われる1限や、昼食後で集中力が落ちがちな3限でも、眠気が吹き飛ばすほど講義に引き込まれました。特に、先生ご自身の研究分野について語られる際には、その情熱の大きさが伝わってきました。研究について、誇りを持って生き生きと楽しそうに語る先生方を見てみると、専門分野を究めるということの魅力を感じました。

講義で学んだことは、3年後期からの研究生活に大きく役立ちました。プログラミングや統計などの直接的に活かせるスキルはもちろん、一見研究テーマには直接関係しないような知識も、思考の土台や理解を深める助けとなりました。サイズも分類も異なる生物同士の共通点を見つけ、研究に活かすことができるのは、数多くの分野にわたる講義で幅広い知識を身につけてきたからこそであり、農学の奥深さを実感しました。

実験実習では、生物に触れる機会が多くありました。ショウジョウバエ、ヨトウムシ、キンギョ、ウシガエル、ウズラ、ニワトリ、マウス、ラットなど、実験を通してさまざまな生物と向き合い、多様な生物がどのようにして命を保ち繋いでいるのかを身をもって理解することができました。農学の発展の裏では多数の動物の命が犠牲になっていると感じ、実験動物に対する感謝の気持ちを強く抱くようになりました。

入学してからの4年間で、農学の表も裏も掘り下げるという貴重な経験を積むことができました。先生方、両親、友人、周りの方々には感謝してもしきれません。今後も、学び続ける姿勢を大切に研究に励んでいきたいと思っています。そして、学んできたことの責任の大きさを自覚しながら社会に恩返ししていきます。



何度でも、何度でも

応用生命科学科 分子生物工学研究室 吉野 明道

名古屋大学に入学し、早くも4年が経ちました。振り返ると、苦しみながらも、もがき、前に進み続けた4年間でした。

私は中学1年から陸上競技の長距離に取り組んできました。名古屋大学の陸上競技部に所属し、400mトラックのある山の上グラウンドという恵まれた練習環境の中で、高い目標を持つ仲間と切磋琢磨しながら実力を伸ばしてきました。月間600km以上走った月もあり、自己ベストを何度も更新することができました。一方で、体調不良や怪我、貧血などに多く悩まされました。長距離パートの目標とする全日本大学駅伝とその予選会には一度も出走することができず、部活を辞めようと思ったこともあります。しかし、挫折のたびに立ち上がり、対策と改善を重ねることで、失敗した時よりも強くなりました。「あの時失敗して良かった。」そう思えるように、今も走り続けています。陸上は今の自分の礎を築いてくれた大事なものです。修士課程に進学しても部に所属し、チームに貢献したいと思っています。

そして4年生になって研究が本格的に始まりました。入学して以来ずっと研究に憧れを抱いていました。私は要領がいい人間ではなく、実験操作が得意なわけではありません。しかし、持ち前の粘り強さを活かして、毎日実験を積み重ねました。先生方や先輩方の大きな助けもあり、学会に参加し、幸運にも査読論文を書くことができました。学会では多くの人に出会い、研究に取り組む上での刺激を受けました。これから先、多くの問題が待ち受けていると思いますが、焦らず、今ある好奇心を大切にしながら、これからも研究に励みたいと思っています。

最後になりましたが、日々ご指導くださった先生方をはじめ、研究室・部活動の先輩、同期、後輩の皆さん、授業や学内活動に関わってくくださった方々、ずっと支えてくれた家族に、心より感謝申し上げます。これからも感謝を忘れず、一步ずつ挑戦を重ねていきます。



大学生活を振り返って

森林・環境資源科学専攻 生物システム工学研究室 松永力英

卒業生の言葉を書くにあたり大学生活を振り返ると、入学以前の想像とは随分異なる6年間であったように思います。それは言い換えると、本当に多くのことを学ばせていただいた期間でした。

6年前を振り返ると、入学と重なるように蔓延した感染症の影響が記憶に強く残っています。当時、大学生活の始まりに胸を躍らせていた新入生は私以外にも大勢いたはずですが、そのような期待に満ちた私たちを待っていたのは、感染症の拡大による自粛生活でした。大学生のメンタルヘルス悪化に関する報道を連日目にする中で、帰省もできず一人で過ごす孤独感や、さまざまな経験を積む時期に身動きが取れない状況など、不安を募らせる要因は多く存在していたはずですが、しかし、この経験はただ悪いものとも言い切れないように思います。一応は独り立ちし、大学生という、物事を自ら決め行動しなければならない時期に、異常な状況下で自分にできることをしようともがいた経験は、今後どこかで私たちの力になる気がしています。また、対面授業が再開された際は他の学生と一緒に講義や実習を受け交流することが新鮮で、誰かと共に学ぶ有り難みを痛感できたことも怪我の功名のように思えました。

4年次に始まった研究室生活は貴重な経験でした。配属先は農学と情報工学を融合した研究室で、私の興味と重なっていました。食や自然への関心から農学部に進学しましたが、講義やコロナ禍で触れた情報技術に影響され、研究室選びではデジタル分野への興味が強くなっていました。研究室活動が始まると、自分の力不足を痛感しましたが、先生方の丁寧な指導や先輩方の温かい支えのおかげで少しずつ成長でき、研究が楽しく感じられるようになりました。実験で望ましくない結果が出ても、そこから推察を導き新たな実験に取り組み期待を超える発見を得られたときは、研究の醍醐味を味わえたような喜びに胸がいっぱいになった記憶があります。また、研究でのデータ分析を通じて情報系分野への関心も一層深まり、修了後の進路がその方面となったことも、入学前には予想もつかなかったことでした。

最後になりますが、いつも遠くから支え続けてくれた家族やご指導いただいた先生方をはじめ、大学生活でお世話になったすべての方に心より感謝申し上げます。皆様のおかげで、大変学びのある充実した大学生生活を送ることができました。本当にありがとうございました。



令和7年度総会、講演会、懇親会の報告

令和7年度の総会を名古屋大学ホームカミングデーにあわせて、令和7年10月18日(土)に農学部第12講義室にて開催いたしました。会長ならびに名誉会長の挨拶に続き、事業・決算報告を行いました。また令和7年度の事業計画・予算を審議しました。さらに令和7-8年度理事・監事について審議し、新会長として福田秀志氏、副会長として吉田康氏の就任が承認されま

した。総会には30名の方にご出席いただきました。講演会は林立幸氏(ヤクルトヘルスフーズ(株)代表取締役社長)によるご講演「今求められる健康飲料。ヤクルト1000開発秘話。」を第12講義室において開催しました。40名の参加があり大変盛況となりました。また夕方には交流会を第7講義室において開催し、親睦を深めました。

令和7年度卒業50周年記念祝賀会の報告

令和7年10月18日(土)に名古屋大学農学部大会議室において、農学部談話会との共催により昭和50年卒業生および修了生(満期退学)の卒業50周年祝賀会を開催いたしました。35名の卒業生の皆様をはじめ、談話会会員、現職員および同窓会役員の出席で盛大に行われました。祝賀会では同窓会会長小川雄二様ならび

に生命農学研究科長・農学部長中園幹夫教授よりご挨拶をいただきました。続いて乾杯、昼食、歓談となりました。ご出席いただいた方々から自己紹介と近況についてのご報告をいただき、会は和やかな雰囲気の中進行しました。また互いの旧交を温めておられました。

人事異動 (2025年1月1日～2025年12月31日)

日付	氏名	異動内容	職名	所属
2025/1/1	高原 照直	昇任	准教授	大学院生命農学研究科応用生命科学専攻
2025/1/1	白武 勝裕	昇任	教授	大学院生命農学研究科植物生産科学専攻
2025/3/31	木羽 隆敏	退職	准教授	大学院生命農学研究科応用生命科学専攻
2025/3/31	近藤 竜彦	退職	講師	大学院生命農学研究科応用生命科学専攻
2025/3/31	小田 裕昭	退職	准教授	大学院生命農学研究科応用生命科学専攻
2025/4/1	永野 惇	採用	教授	生物機能開発利用研究センター
2025/4/1	萩尾 華子	配置換	助教	大学院生命農学研究科動物科学専攻
2025/5/1	任 亮	採用	助教	大学院生命農学研究科附属鳥類バイオサイエンス研究センター
2025/8/1	大本 敬之	配置換	助教	大学院生命農学研究科応用生命科学専攻
2025/8/16	井坂 友美	採用	准教授	大学院生命農学研究科植物生産科学専攻
2025/11/1	杉浦 大輔	昇任	准教授	大学院生命農学研究科植物生産科学専攻
2025/11/1	永井 啓祐	昇任	准教授	生物機能開発利用研究センター

(人事係より提供された情報をもとに作成しました。糖鎖生命コア研究所への異動関係は除いております。)

2025年度名古屋大学大学執行体制・全学組織における役職者 (生命農学関係分)

名古屋大学ジェンダーダイバーシティセンター長	山崎真理子	副総長補佐	山崎真理子
高等研究院長	榊原 均	副総長補佐	池田 素子
副総長補佐	福島 和彦	副総長補佐	井上 直子

農学部・生命農学研究科同窓会ホームページ案内

同窓会の活動は農学部・生命農学研究科同窓会（セコイア会）ホームページでもご覧いただけます（<https://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/>）。住所変更・寄付金・会費などのご案内もございますのでぜひご覧ください。ホームページに関するご意見・ご要望がございましたらお寄せください（HP 担当：inatetsu@agr.nagoya-u.ac.jp）。またセコイア会では会員の皆様のメールアドレス収集に努めております。Google フォーム（<https://forms.gle/MrkmXtUkWibF8fHA>）からメールアドレスをご教示くださいますようお願い申し上げます。



セコイア会 HP
QR コード



メールアドレスご登録
QR コード

一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会 令和6年度（令和6年9月～令和7年8月）事業報告

1. 総会の開催

令和6年10月19日、名古屋大学農学部第12講義室において総会を開催した。

2. 卒業・修了50周年記念祝賀会の開催

令和6年10月19日に卒業・修了50周年を迎えた方をご招待し、農学部卒業50周年記念祝賀会を開催した。

3. 同窓生在籍企業紹介の共催

令和6年10月19日に名古屋大学農学部との共催で同窓生在籍企業紹介を開催した。

4. 講演会の開催

令和6年10月19日に名古屋大学農学部第12講義室において、講演会を開催した。

講師：榊原均氏

演題：「栄養環境に応答した植物成長調節の分子機構」

5. 交流会の開催

令和6年10月19日に名古屋大学農学部第7講義室において、交流会を開催した。

6. 卒業・修了祝賀会の開催

令和7年3月25日に卒業・修了祝賀会を開催した。

7. 秋季卒業・修了祝賀会における記念品配布

秋季卒業・修了祝賀会において記念品を配布した。

8. 会報「セコイア通信」の発行

令和7年3月に発行した。

9. 同窓生の参加を促す事業の考案、連絡体制の強化

同窓生が同窓会に参加しやすくなるよう事業を考案している。また Google フォームを用いたメールアドレスの収集を行っている。さらにホームページも利用し、同窓生への連絡体制を強化している。

10. ホームページの作成と管理

同窓会ホームページのアップデートを完了するとともに一層の充実を図った。

特に「同窓生のご活躍」ページを更新している。

11. 事務局機能の充実

理事・監事・幹事・事務局の仕事を整理し、適宜削減・拡充を行った。

12. 支部活動の支援

卒業生への名簿適用など、支部活動への支援を行った。

13. 資産運用計画の立案

資産運用計画の提案を行った。

14. 同窓会名簿データの管理

同窓会名簿データの更新を行うとともに、要請に応じて名簿情報の提供を行った。

15. 全学同窓会への協力

全学同窓会幹事会に役員を出し、運営に協力した。

16. 新規事業の考案

農学部・生命農学研究科同窓会の交流を活性化するための新たな事業を検討している。

特に10年周年同窓生への「名古屋大学への集い」へのご招待（全学同窓会）と合わせた新事業を検討している。

17. 持続可能な財政管理の検討慢性的な赤字体質を脱却するため、財政の改善について次のような方策を中心に検討する。

- (1) 会費納入率の向上
- (2) 収益事業
- (3) 寄付金の増額（同窓生、会員、同窓生の関係する法人などへの依頼強化）

今年度は特にセコイア通信への緊急のお願いの同封、入学式父母等説明会での永久会費納入のお願いなどを行った。

一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会
令和7年度（令和7年9月ー令和8年8月）事業計画

1. 総会の開催

令和7年10月18日、名古屋大学農学部第12講義室において総会を開催する。

2. 卒業・修了50周年記念祝賀会の開催

令和7年10月18日に卒業・修了50周年を迎えた方をご招待し、農学部卒業50周年記念祝賀会を開催する。

3. 講演会の開催

令和7年10月18日に名古屋大学農学部第12講義室において、講演会を開催する。

講師：林立幸氏（ヤクルトヘルスフーズ（株）代表取締役社長、92学士卒、94修士卒：農学科栽培育種研究室）

演題：「今求められる健康飲料～ヤクルト1000開発秘話～」

4. 交流会の開催

令和7年10月18日に名古屋大学農学部第7講義室において、交流会を開催する。

5. 卒業・修了祝賀会の開催

令和8年3月25日に卒業・修了祝賀会を開催する。

6. 秋季卒業・修了祝賀会における記念品配布

秋季卒業・修了祝賀会において記念品を配布する。

7. 会報「セコイア通信」の発行

令和8年3月に発行する。

8. 同窓生の参加を促す事業の考案、連絡体制の強化

同窓生が同窓会に参加しやすくなるよう事業を考案する。またメールアドレスの収集など、同窓生への連絡が円滑に行えるようする。さらにホームページも利用し、同窓生への連絡体制を強化する。

9. ホームページの作成と管理

同窓会ホームページのアップデートを完了するとともに一層の充実を図る。

10. 事務局機能の充実

同窓会が一般社団法人化したため、事務局機能の整理が必要となる。

理事・監事・幹事・事務局の仕事を整理し、適宜削減・拡充を行う。

11. 支部活動の支援

卒業生への名簿適用など、支部活動への支援を行う。

12. 資産運用計画の立案

資産運用計画の提案を行う。

13. 同窓会名簿データの管理

同窓会名簿データの更新を行うとともに、要請に応じて名簿情報の提供を行う。

14. 全学同窓会への協力

全学同窓会幹事会に役員を出し、運営に協力する。

15. 新規事業の考案

農学部・生命農学研究科同窓会の交流を活性化するための新たな事業を考案する。

16. 持続可能な財政管理の検討、慢性的な赤字体質を脱却するため、財政の改善について次のような方策を中心に検討する。

- (1) 会費納入率の向上
- (2) 収益事業
- (3) 寄付金の増額（同窓生、会員、同窓生の関係する法人などへの依頼強化）

一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会 令和6年度決算

令和6年9月1日～令和7年8月31日

【収入の部】

単位：円

費目	金額	細目	金額	備考
会費等 (会費等のうち未収分_1,340,000)	3,580,000	永久会費 一般会費	3,560,000 20,000	178名(20,000円/名) 4名(5,000円/名)
寄附金収入 (寄附金収入のうち未収分_75,000)	732,014	寄附金	732,014	83名
事業収入	29,615	広告掲載費	29,615	2件
令和6年度総会昼食費	8,000	食事代	8,000	4名
令和6年度総会懇親会費	26,000	飲食代	26,000	26名
前年度繰越剰余金	19,537,261			
合計	23,912,890			

(実質収入 4,375,629)

【支出の部】

費目	金額	細目	金額	備考
会報発行費	2,000,605	会報印刷費 発送費	449,350 1,551,255	9,500部
令和5年度総会	220,070	講演料 役員交通費 懇親会費	33,411 41,500 145,159	源泉所得税分を含む 4名
第19回卒業50周年祝賀会	106,611	飲食代 事務・通信費	90,000 16,611	記念写真印刷・発送を含む
評議会・ホームカミング ディ事業	160,415	会場設営費 旅費 事務・通信費	67,100 78,020 15,295	同窓生在籍企業紹介 ディスプレイパネル 交通費、日当(源泉所得税分を含む)
卒業・修了祝賀会	350,601	飲食代 記念品代 役員交通費	117,217 193,384 40,000	3名
ホームページ管理費	0		0	
役員報酬	148,548	役員報酬	148,548	12名×12,379(源泉所得税分を含む)
支部支援金	150,000	関東支部 関西支部	120,000 30,000	令和6年度分 令和6年度分
事務局員雇用	908,800	事務局員雇用費	908,800	1名
スペースレンタル料	0	スペースレンタル料	0	4平方メートル
郵便振替手数料	29,325	郵便振替手数料	29,325	
会計士顧問料	55,000	会計士顧問料	55,000	会計士1名
会計士報酬	44,000	会計士報酬	44,000	年末調整、法定調書作成・手続き
通信・事務費	178,282	通信・事務費	178,282	オンライン会議費・郵送費・パソコンなど
会費重複支払いの返金	40,000	会費重複支払いの返金	40,000	
会費徴収手数料	7,991	会費徴収手数料	7,788	2024年9月～12月分
会費徴収手数料(未払金)	24,816	会費徴収手数料	24,816	2025年1月～8月分(未払金)
市民税の延滞金	1,100	市民税の延滞金	1,100	
市民税	50,000	市民税	50,000	市民税(事業年度:R5.9.1からR6.8.31まで)
法人税住民税事業税	21,000	課税納付	21,000	県民税均等割
市民税	50,000	市民税	50,000	市民税(事業年度:R4.9.1からR5.8.31まで)
次期繰越剰余金	19,365,726			
合計	23,912,890			

(実質支出 4,911,329)

一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会 令和7年度予算

令和7年9月1日～令和8年8月31日

【収入の部】

単位：円

科目	金額	細目	金額	備考
会費等	3,990,000	永久会費	3,400,000	170名
		一般会費	20,000	4名
		寄付金	480,000	48名
		広告掲載費	90,000	6件
卒業50周年祝賀会会費	70,000			2,000円×35名
令和7年度総会懇親会費	35,000			1,000円×35名
前年度繰越金	19,365,726			
合計	23,460,726			

(実質収入 4,095,000)

【支出の部】

科目	金額	細目	金額	備考
会報発行費	2,000,605	会報印刷・発行費	2,000,605	9600部(8600部発送)：サラトとクイックス
令和7年度総会	220,500	講演料	34,000	源泉所得税分を含む
		役員交通費	41,500	4名
		懇親会費	145,000	
卒業50周年祝賀会	125,000	飲食代	83,000	
		印刷発送費	42,000	招待状、記念写真送付
評議会・HCD事業	154,000	会場設営費	68,000	
		交通費	68,000	
		事務・通信費	18,000	
卒業・修了祝賀会	345,000	飲食代	100,000	
		記念品代	205,000	
		役員交通費	40,000	3名
秋季卒業・修了祝賀会	10,000	記念品代	10,000	
支部支援金	165,000	関東支部	120,000	令和6年度分
		関西支部	45,000	令和6年度分
役員報酬	150,000	理事、幹事	150,000	12名×12000、源泉所得税分を含む
会計士・司法書士報酬	143,000	会計士・司法書士	143,000	会計士1名、司法書士1名、源泉所得税分を含む
事務局員の雇用	908,800	事務局員の雇用	908,800	1人
事務室のレンタル料	91,200	事務室のレンタル料	91,200	4m2
その他諸費用	337,500	支払手数料	45,000	郵便振替手数料、送金手数料など
		課税納付	21,000	県民税
		通信費	61,500	オンライン会議費・発送費など
		事務費	160,000	事務用PC、文房具など
		市民税	50,000	市民税(事業年度：R6.9.1からR7.8.31まで)
新規事業	50,000		50,000	同窓会活性化のための新規事業
次期繰越剰余金	18,760,121			
合計	23,460,726			

(実質支出 4,700,605)

令和7年度 同窓会役員

名誉会長	中園 幹生 (研究科長・植物遺伝育種学)	幹事 (総務)	青木 弾 (森林化学)
会長	福田 秀志 (学外)		杉浦 大輔 (作物科学)
理事 (副会長)	吉田 康 (学外)		高橋 宏和 (植物遺伝育種学)
(関東支部長)	石川 靖文 (学外)		西島 謙一 (鳥類バイオサイエンス)
(関西支部長)	加藤 壽郎 (学外)	幹事 (会報)	藤田 祐一 (ゲノム情報機能学)
幹事長	稲垣 哲也 (生物システム工学)	幹事 (会計)	加藤 晃代 (分子生物工学)
副幹事長	青木 弾 (森林化学)		中山 友哉 (動物統合生理学)
監事	藤井 潔 (学外)	事務	赤池美紀子
監事	大谷 仁志 (ゲノム・エピゲノム・ダイナミクス)		

関東支部だより

前関東支部長 石川 靖文 (S56食D)

関東支部では、初夏の「新卒者歓迎会」と晩秋の「総会」を、長らく神田錦町の学士会館で開催してきたが、地域再開発による同館の一時休業に伴い、場所をKKRホテル東京に移した。同ホテルは、平成13年(2001)第9回支部総会の開催場所であったが、故・芦田淳(きよし)先生(元学長)の急逝で中止。KKR 選択は、先生のご無念追悼の意味も兼ねてのことであった。

「歓迎会」は、令和7年6月7日(土)に開催。新卒者3名と支部役員7名の10名が参加した。皇居の杜を展望できる12階「桜の間」にて、「なごみ桜」で乾杯、特製弁当を食べながらの自己紹介。そこから派生して、就職事情、国際情勢、趣味など、様々な話題で歓談した。学位授与式当日の祝賀会では酒がでなかったこともあり、なごみ桜に「ようやく卒業できた実感」とか。その後有志で皇居東御苑を散策したが、初夏の日差しの強さにバテる役員連。次年の課題となった。

「総会」(第28回)は、令和7年11月8日(土)東京スカイツリーを望む11階「朱鷺の間」で開催。参加者は、会場17名、オンライン9名、合計で26名となった。全学同窓会関東支部岸事務局長(理学部)、学士会『NU7』編集の薄井マネージャーのご参加もいただいた。またオンラインでは関西支部会員の参加も得た。

総会議事の部では、近藤事務局長の進行で、支部長挨拶、横井監査役の会計監査報告、本部幹事長の稲垣先生の簡潔な本部活動報告を経て、次年度役員選出を行った。特別講演の部では、小西副支部長の進行で、前研究科長・学部長、森林・環境資源科学 教授の土川寛先生(H1林産M)に「農学から発信される異分野融合・国際協働研究－Agricultural Spectroscopyの展開－」について、東京科学大学国際医工共創研究院 准教授の安達貴弘先生(H2食D)に「食による前未病・超早期未病を標的とした予防・治療」について、それぞれお話を伺った。

総会議事では、前年度会計が監査承認された。今年度役員については、支部長は石川から横井幹事へ、こ

れに伴い監査役は横井幹事から浅井幹事へ、それぞれ交代した。本部の活動報告については、本誌別記事をご参照いただきたい。

土川先生の講演は、近赤外線(Near Infrared:以下NI、800～2500nm)の、主として生命農学分野における多岐な応用についてのものであった。1800年に発見されたNIは、長らく“使いものにならない光”といわれてきたが、1960年代米国で、NIによる小麦タンパクの非破壊検査の研究が進み、その後各種分野で分析ツールとしての研究が活発化したとのことである。

実用化の例として、甘さを指標とした果物(有田ミカン、リンゴ、メロン)の自動選果が紹介された。キウイや白イチゴの甘さについても測定結果が示された。ちなみに、リンゴは皮の近くが甘く、蜜入と蜜無しで甘さは変わらないのだとか。その外、オンライン穀物検査、ゴムの木からの採取可能樹液量の評価、パターの品質評価などについても紹介された。

先生のNI研究は木材分野への応用から始まったとのことであったが、①合板の強度マッピング、②パルプの坪量(つばりょう:紙の単位重量(g/m²))計測、③木材の乾燥度合い計測、④水の残り具合の可視化、⑤内部水分状況の可視化——などが可能とのこと。また、かなりの確度で板から樹種の判定ができ、38種の板の判定で、目視での正答率56%に対し、NIでは90%を得ている。このことは、コメの種類でも同じで「検量線があれば」高い精度での判定が可能とのこと。

NIの医療科学への応用としては、脳血管中のヘモグロビン流量計測による脳の活動度の評価によって、「うつ病の診断」が6～7割の精度で可能とか。また脳表層のNI伝播状況の測定によって、脳の活動状況を測る研究も行われていて、小泉純一郎元首相が講演で、「人間の気持ちが計れないか?」と言ったとか。

以上見てきたように、NIは多分野への応用が可能であるが、そのためには、①基礎データの収集、②AIなどによるデータ解析方法の高度化、③装置の小型化とスマート化が重要であることが強調された。

国際共同研究であるが、NIの基礎研究では米国が、応用開発では中国が進んでいるとのこと、NIの研究

が始まった米国農務省ベルツビル農業研究センターと森林科学研究部門のある中国の大学が紹介された。先生の研究室には、5カ国の学生・研究生が在籍しており、共同研究の輪は、さらに広がることが期待される。

質疑応答では、「ヒトの生体情報が測定できないか?」「マツクイムシの侵入は検出できるか?」「日本の研究ランキングが下がっているのは、絶対的? 相対的?」など、活発なやり取りがなされた。

安達先生の講演は、腸の絨毛の可視化イメージングの図から始まった。コメによる絨毛への影響を示しながら、そこで生起する健康問題は、コメというよりは受け入れる身体側の問題であると指摘。身体の炎症は免疫細胞の働きによって起こるが、免疫系の半分以上(70%?)は腸も関与しており、腸への刺激(飲食)は即ちに脳に伝達され免疫系の反応を喚起する。その意味で、腸への刺激である「食」の問題は重要となる。

特に、胎児期・乳幼児期は環境要因による影響を受けやすく、その異常(素因)は、後の生活習慣病などの発症を規定してくるので、適切な教育(eustress)による疾病・感染、精神的ストレスに対する頑健性(robustness)の鍛錬が重要であるとのこと。

日本未病学会では、「未病」とは「自覚症状はないが検査では異常がある状態」「自覚症状はあるが検査では異常がない状態」としているが、先生のグループは、自覚症状もなく、従来の検査では検出できない微細な異常を“前未病”と定義し“前未病・超早期の未病”を標的とした研究に着手したとのことであった。

そのため、免疫細胞の動態のみならず、活性化までを生体内でモニターできる細胞系譜特異的なカルシウムバイオセンサー(YC3.60)マウスを世界に先駆けて開発。その細胞内Ca²⁺シグナリングに着目して、体内での免疫細胞の活性化や分化の様子をリアルタイムで可視化することで、病態が発症しなくても素因(前未病・超早期未病)が検出できることを明らかにした。

この系をさらに発展させ、アレルギー、ウイルス感染、自己免疫疾患などの各種疾患の発症、および病態の進行過程で起こる事象を解明してきたという。余談であるが、Ca²⁺バイオセンサーはマウスでは出来ないとの論文があったが、それを知らずに、何度もチャ

レンジしていたら出来てしまったとのことであった。

前未病の観点からは今後、食品の精確な評価が必要であるが、総論的には1980年代の食事が健康に一番いいとのこと。質疑応答で出た例も含め、いくつかを以下に列挙しておく。

- 味噌汁は免疫に良いといわれていたが実証された
- コメは前未病・超早期未病対策に最適であるが、品種・産地・栽培方法に依存する
- 玄米は免疫系の過活性化で逆効果の場合もある
- 金芽米を妊婦に食べさせたら新生児の体重が増加
- 病気になってからのサプリ摂取は注意を要する
- 乳酸菌飲料は免疫の低い人には効果がある
- ω3脂肪酸(DHA、EPA、α-リノレン酸など)には抗炎症作用がある

最後は、医薬の分野での“tailor-made medicine”のように、食の分野でも、個人の遺伝子や腸内環境に基づいて最適な食品を提案する“precision food”のアプローチが必要であろうと締めくくられた。

講演終了後は、KKRのご厚意によりスタジオで集合写真を撮影。いったん休憩の後、近藤事務局長の司会で懇親会に入った。「来年は講演してもよい」「別学年と思っていたら同学年だった3人組」「会社の仕事に直ちに役立つ講演が聴けた」「思わぬ知縁を得た」など、飲食しながらの近況報告に一同大いに盛り上がった。

なお、今回の2つの特別講演の概要については、一般社団法人学士会のWeb総合情報誌『NU7』2026.5 No.65に掲載の予定である。

次回の新卒者歓迎会・総会であるが、本年2月17日(火)の役員会で見直しが決定され、現在、鋭意検討中である。その詳細については、5月上旬を目処に支部HPに掲載の予定である。

末尾になるが、小職の関東支部長としての役目は、本稿にて終了する。今後は1幹事としての役割を担うこととなる。足かけ17年に亘るご厚誼に感謝します。

支部HP：<http://www.nua-alumkanto.sakura.ne.jp/>
支部連絡先 E-mail：y_ishikawasan@yahoo.co.jp



令和7年11月8日 名古屋大学農学部同窓会 セコイア会関東支部総会 於 KKRホテル東京

関西支部だより

関西支部長 加藤 壽郎 (S45農 M)

関西支部では、毎年、11月の第一土曜日が同窓会支部総会の日となっております。本年度は11月1日に、18名の方にご参加いただき、第18回の関西支部総会を開催いたしました。新しく参加された方も加わり、昨年よりも参加人数が増え、例年以上に盛り上がった同窓会となりました。今回は、名古屋大学大学院生命農学研究科長・農学部の中園幹生先生にお越しいただき、名古屋大学農学部・生命農学研究科の近況をご説明いただくとともに、ご専門の研究に関連して、作物研究による持続型農業への挑戦と題して、ご講演いただきました。大学の近況のお話の中では、あらためて、名古屋大学農学部が、時代の要請に従った形の新たな生命農学へと進化してきている姿を目の当たりにしました。また、海外の大学とジョイント・ディグリープログラムといった新しい取り組みをされており、感銘を受けました。つづいて、作物研究による持続型農業への挑戦のお話では、まさに農業の本流のお話をいただき、大変興味深く聞かせていただきました。畑作物の湿害が今後増加して問題となるであろうことを見越して、耐湿性作物の育成を目指しておられる研究には、昔、学んだことを思い出し、深い感銘を受けました。

午前中にご講演をいただき、午後は、楽しい懇親会を行いました。いつものように3時間の長丁場の懇親会です。ご参加いただいた方全員に、近況や最近の思いなどを語っていただき、楽しい団欒となりました。同じ大学の学部で学んだという経験を土台として、お互いを信頼し、胸襟を開いてお話していただく姿を見ると、本当に素晴らしい会であると実感いたしました。参加された方に心より感謝いたしますとともに、これまでご参加の機会がなかった方も是非一度お越しください。

関西支部は、支部長：加藤壽郎、事務局長：寺前朋浩、会計：井野右文、会計監査：野村章、幹事：入野哲朗、

駒田肇、大賀久美子、沖森泰行の8名で運営してまいりましたが、活動のさらなる活発化を目指して、この度、新たに、長谷川章子さんに幹事として加わっていただくことになりました。幹事会を年二回開催して、活動の充実を図っていくつもりであります。

セコイア会の関西支部は、全学同窓会の関西支部の組織下でも活動を続けておりますが、今年度の全学同窓会関西支部総会は、5月17日に開催されました。総会では、同窓会代表幹事の木村彰吾先生から、全学同窓会の活動報告をいただき、名古屋大学総長杉山直先生から、大学の現状報告をいただきました。続いての講演会では、総長から直々ご専門のお話を伺う企画となっております。お話を伺って、「光の宇宙と暗黒の宇宙」と題してお話しいただきました。宇宙の壮大なお話で興味が尽きませんでしたが、宇宙は、暗黒の物質で詰まっていそうだと、という話にはわかに信じがたく、しかし、それが無いといろいろな事象を説明できないようで、ご講演の後の懇親会でも質疑が続くといった盛況ぶりでした。

関西支部のもう一つの重要な活動は、支部同窓会報の電子メール配信です。コロナ禍で、総会などの開催がままならなくなったため、同窓会活動の継続の一環として、令和四年三月より、年二回の配信を始めました。皆様からの積極的なご寄稿によりまして、第八号までの配信を終えております。配信内容は、名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会ホームページの関西支部活動の中にも引用いただいております。ご興味のおありの方は是非ご覧ください。

2026年度は、3月に同窓会報第九号の配信、9月に同窓会報第十号の配信、また、11月7日(土)に同窓会総会を予定いたしております。連絡先は以下の通りですので、ご参加希望の方は、是非、ご一報ください。

(事務局) 寺前 朋浩 (昭61生 M)

〒669-1103 兵庫県西宮市生瀬東町37-23

E-mail: kssequoia23@gmail.com



平成7年セコイア会関西支部総会

名大遠州会だより

佐々木 健 (平成5年畜産)

名大遠州会は、静岡県西部(大井川以西)に居住または勤務する名古屋大学、大学院またはその前身校出身者から構成され、平成8年に設立されました。同窓会を毎年、また総会は隔年で開催しています。ここ数年はコロナ禍の影響により開催中止が続いておりましたが、令和6年より再開し令和7年も無事に開催できました。

さて、令和7年は5月31日(土)に浜松市内のホテルクラウンパレスにて、名古屋からの杉山直総長、全学同窓会の伊藤義人副会長、木村彰吾代表幹事をお迎えし、会員44名が出席して同窓会を開催しました。

最初に出席者全員の集合写真を撮影し、野村和彦会長の挨拶の後、アツミ電気株式会社林寛樹様により、「最新のカメラシステムについて」と題して講演会を実施しました。引き続き杉山直総長が、「名古屋大学の国際戦略-21世紀、Sustainableな世界を構築するアジアのハブ大学-」というタイトルで名古屋大学の現況や取り巻く環境、今後向かっていく方向についてスライド資料を投影しながら詳しくお話しされました。伊藤副会長からは遠州会と全学同窓会の歴史について、木村代表幹事からは「名古屋大学全学同窓会2024年度の活動報告と2025年度の活動計画について」のご紹介がありました。

その後、南方陽顧問の乾杯の発声で懇親会をスタートし、1年ぶりの再会を楽しみました。会の中盤では用意した名大オリジナル商品や幹事提供の品物を景品としたビンゴゲームを実施し全員大いに盛り上がり、た



いへん和やかな雰囲気の中、黒木辰芳副会長の中締めで21時00分に終了しました。

また本年度は、この遠州会同窓会に初参加してくださいましたアナウンサーの坂本あゆみ様(H23経済学部卒)からご挨拶をいただき、さらに遠州会の会報にもご寄稿をいただきました。我々幹事一同も、遠州会への新加入や同窓会への初参加は大歓迎でございます。ご興味をお持ちいただいた皆様におかれましては、何卒よろしくお願いたします。

このように、名古屋大学総長や全学同窓会の関係者も来賓としてお招きし、同窓会や総会を毎年5~6月ごろに開催しております。また、ビンゴゲームやミニコンサートなどを余興として盛り込んでおり、老若男女の参加者全員が楽しめる企画となっております。本年につきましては、2026年6月6日(土)18:00~を予定しており、遠州会会員の皆様には開催案内をお知らせしますので、何卒よろしくお願いたします。また、遠州地区にお住まいで、このセコイア通信にてこの「遠州会」にご興味をお持ちになられた方(名古屋大学農学部や大学院生命農学研究科の卒業生)は、当方にメール等でご連絡くださればご案内いたします。

最後に、2025年度はクマの出没が何かとニュースになりました。さすがに、名古屋市内ではクマの出没は無いと思いますが、私の住む「浜松市内」はクマの目撃が非常に多く報告されています。その原因は、実はとても明確です。平成の市町村大合併で、太平洋岸から長野県境まで全部「浜松市」になってしまったからです(人災かも?)。

連絡先：遠州会農学部幹事 佐々木健
〒431-3192 浜松市中央区半田山1-20-1
浜松医科大学 器官組織解剖学講座
Tel : 053-435-2293 Fax : 053-435-2290
Email : tsasaki@hama-med.ac.jp

農学部談話会からのお知らせ

農学部談話会は平成14年(2002)年10月11日に齋藤哲夫(農学)・並木満夫(食品工業)・山本進一(農学部長)の発起人に呼びかけがあり、このお二人に加え鈴木太七(林学)・保田幹男(畜産)・瓜谷郁三(農芸化学)・寺澤真(林産)の元教授を世話人として設立されました。当農学部(大学院)に在籍した教職員を会員とし、退職教職員(OB・OG)間の親睦、現役世代との交流・気楽に歓談する場、という位置付けになっていました。現在の規約では「相互の親睦連絡を図り、合わせて名古屋大学農学部及び同大学院生命農学研究科の発展に寄与することを目的」とする、なっています。2002年の第1回から2008年の第19回までの記録が2009年6月6日付で「農学部談話会第1集」として齋藤・寺島・梅村により編集されています。あとがきには「農学部のみなさんが談話会を広く承知され、こ

の活動が今後とも持続されることを願って編集しました。」と書かれています。第49回までは現役教員である同窓会役員をサポートを受けてきましたが、第50回からは独自に活動が求められるようになりました。2018年11月7日に研究科長(学部長)と談話会世話人が懇談した中で、研究科長から談話会、同窓会、名古屋大学基金の視点から問題提起がありました。談話会も同窓会も研究科として対応する必要(役割の重要性が増していること)があると認識しているということでした。任意団体であるが両組織とも重要であり、研究科としてサポートする体制をとりたいたいというものです。以上のように活動の重要性は共有できるものの、その期待から見ると、談話会の活動はその域からはかなり遠いという感はぬぐえません。

2025年の会合では10月18日の同窓会行事(名古屋大学ホームカミングデー)に合流させていただきました。卒後50周年の招待者は昨年より多く、35名の参加で盛会になりました。皆さんから学生時代の思い出や現在までの経過・生活の様子を聴かせていただきました。この集まりでは、談話会から宗宮弘明先生に挨拶をして頂きました。談話会からの出席者は山下興亜・小鹿一・東村博子・柳沼利信・宗宮弘明・織田銃一の6名が出席し、各先生より近況・心境を語って頂きました。また同窓会代議員として堀尾文彦・山木昭平の旧教員2名も参加されていました。なお、諸般の理由で参加されなかった寺島典二・下村吉治・松本哲男・北島健・肘井直樹・杉山達夫・木村真人・川北一人の旧教員の方々から、盛会への期待と激励をいただきました。

世話人として新規に東村博子さんに加わっていただきました。宗宮・小鹿・柳沼・磯部・織田の世話人は継続します。談話会として、引き続き世話人を募集していますので自薦他薦をお願いする次第です。アドレスが分かっている方にはメールで案内をお送りしていますが、アドレスが不明の方が多くなってきました。案内が届いていない場合にはメールで連絡いただければありがたく思います。

2025年の物故者(ご親族様からご連絡いただいた)は、10月16日に武岡洋治先生(享年88歳)及び旭正先生(享年96歳)でした。ご冥福をお祈りします。

(文責: 織田銃一 oda_senichi-at-yahoo.co.jp)

「最近考えること—風景の移り変わり—」

横田 浩臣(11回卒 S40畜)

近頃、「私の故郷」という言葉は聞かれなくなっている。という私の故郷はどこであろうか。記憶にはないが3歳になる前に東京の空襲で焼け出され、父の故郷(現在では稲沢市の水郷地帯の小さな集落)に落ち着いた。小学校入学と時を同じくして、名古屋へ移り住んだ。その頃の名古屋はまだ、あちこちに水田があり、田舎であった。友達が集って野原で野球に興じていた頃が懐かしい。

長じて、名古屋大学へ入学し、40数年間お世話になり、2006年に定年退職した。大学での研究生生活の後半を、農学研究科附属の農場で過ごした。農場は28 haの敷地を持ち、農学と畜産学の研究・教育の場であった。地域住民に開かれた農場を目指し、文部科学省主催の「地域貢献特別支援事業」を、農場を主体として、数年間、農学研究科等の多くの教員の協力で開催し、成功した。

定年退職後は地元住民と一緒に、地域の緑環境を残すためのボランティア活動を立ち上げ、現在に至っている。数えてみれば、ちょうど20年になる。私のボランティア活動は、「里山」をキーワードにしている。里山風景を少しでも残そうとして、体力維持の目的も兼ねて、長久手市、設楽町、日進市のボランティアと共に取り組んでいる。「里山」という言葉は「広辞苑」には、1995年に初めて取り上げられた。愛知万博の開催地問題が起こった頃である。そして、2010年に生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が開催され、「里山」が見直された。それから15年、その言葉が社会から葬られていくのを感じている。

日本の国土の3分の2は森林である。その他の地域は概して、海辺から徐々に標高を上げ森林へと続いている。その森林との境界付近に「里山」と呼ばれる農村地帯が存在していた。そこへは、当時の室内暖房に欠かせない薪取りや炭焼き、また草取りなどのために日常的に人が出入りし、見通しが良い地帯であった。そのために、野生の動物には、例えばクマやイノシシは身を隠す場所が少なく、近づきにくい場所であった。しかし、燃料の変化により、また高齢化により、地域農業の衰退によって、里山が管理できなくなり、放置



されているのが現状である。

また、昨今のコメの高騰は、コメ生産農家のありがたさを再認識する事件であった。現在のコメ作りには、各種の大型機械を導入して大規模に生産しないと生産コストが下がらず、小規模の専業コメ農家が減少している現状である。私の住む地域も小さな水田が多く、この数年の間に水田は埋め立てられたり、放棄地となったりして、急速に減少しているのが現状である。このような状況下で、私が仲間と長久手で里山風景を残そうとして活動しても無駄かも知れない。前ページ上の写真は2016年2月に、同下の写真は2025年12月にほぼ同じ場所を撮影した風景である。この10年間に、この写真内の田んぼはすべて放棄され、周りに木々が入り込んでいる。

長久手市内ではイノシシの被害が多発し、全国的には昨年の晩秋に発生した「クマ騒動」はまさしく「里山」が消滅しかけているために起こっているひとつの現象と思われる。そんなことを考えながら、それでも、今日も里山の整備に出かけ、楽しく汗を出す予定である。

愛知県の鳥獣行政に関わって

織田 銑一 (15回卒 S44畜 B)

2025年は秋田県を中心にツキノワグマの市街地出没が多発し人身被害も多く報道された。愛知では絶滅危惧1A類と評価され、希少な種という位置にある。県内のツキノワグマについて6月から11月にかけてくくりわなによる錯誤捕獲1件、家畜被害1件を含めて18件(目撃例、定点カメラ)が県で情報共有されている。人身事故はなく、特定鳥獣に指定される状況にはない。当方の経験した2010年の秋は目撃情報が異常に多く、また殺処分4や交通事故1の5頭の解剖に立ち会った。愛知のレッドデータブック作成委員や、2008年から特定鳥獣に関する審議会に座長として加わっていたため、深刻な思いをしたことを思い出す。

国レベルの鳥獣行政では1895年「狩猟法」として法制化されて以来、1963年には「鳥獣保護法」に改正、2002年に口語体に変更され、生物の多様性の確保が目的に加わった「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律」に大幅に改定、2002年には「生物多様性基本法」が加わり、2014年に名称が鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律に改められ、「管理」という言葉が加わった。この間に絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(種の保存法)が平成4(1992)年6月制定、翌年4月施行されている。

愛知県には環境局自然環境課野生生物・鳥獣グループという部署があり、その下に特定鳥獣保護管理検討会という審議会が設置されている。これは環境省管轄の鳥獣保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律(鳥獣保護管理法)にもとづいている。保護とは生息数を適正な水準に増加させる、生息地を適正な範囲に広げることを意味し、管理とは生息数を適正数に減少させる、生息地を適正な範囲に縮小させる、という意味である。愛知県では特定鳥獣としてニホンカモシカ、ニホンジカ、イノシシ、ニホンザルの4獣が指定されている。種の保全を図るとともに大きな被害が出ないように、科学的管理を行うというものである。筆者は2008年から愛知県環境審議会自然環境部会の部会長を、その後2014年に大幅に改定された新検討会の座長を継続して努めている。様々な被害防除対策が行われてきているが、被害は極端な増加は抑えているものの、無くなる状況ではない。そのため一定数の駆除が並行して行われている。ちなみに愛知県内における最近5年の1年平均駆除(狩猟を含む)頭数はニホンカモシカ26、ニホンジカ4954、イノシシ7174、ニホンザル296である。この数字をどのように考えたらよいのであろうか。ニホンジカは6000頭、イノシシ10000頭の殺処分を目標に計画されているが、現状では目標に到達することは困難であり被害をなくせる状況にはない。

農学部の話題 —2024.1.1-2024.12.31—

- ・食料危機に希望の芽 でんぷん豊富 熱帯植物「サゴヤシ」 名大など原産地で栽培指導 中日新聞2025/1/14
- ・ゲノム食品 浸透半ば 制度化5年「知らない」9割 安全性「理解促進を」 読売新聞2025/1/27
- ・甘〜く光る白イチゴ 糖度の分布 画像で可視化 稲垣哲也名古屋大学生命農学研究科准教授 中日新聞2025/2/3
- ・葉内部 生きたまま観察 生理応答の解明期待 谷口光隆名古屋大学生命農学研究科教授 日刊工業2025/2/4
- ・メタボ予防成分発見 イノシトールで腸内改善 小田裕昭名古屋大学生命農学研究科准教授 日刊工業2025/2/27
- ・朝食・活動なしが原因 内臓脂肪型肥満 体内時計に乱れ 名大 日刊工業2025/3/7
- ・第62回読売農学賞 受賞者7人の業績 フグ毒の機能解明に貢献 読売新聞2025/3/31
- ・種子形成に「へその緒」 160年ぶり植物新組織 笠原竜四郎名古屋大学生物機能開発利用研究センター特任准教授が発見 中日新聞2025/4/8
- ・種子へ栄養運ぶ「ゲート」発見 コメ肥大化成功 笠原竜四郎名古屋大学生物機能開発利用研究センター特任准教授 岐阜新聞2025/4/8

- ・種子の“へその緒”発見 笠原竜四郎名古屋大学生物機能開発利用研究センター特任准教授 160年ぶり植物新組織 日刊工業2025/4/8
- ・笠原竜四郎名古屋大学生物機能開発利用研究センター特任准教授 160年ぶり新発見 種子に栄養運ぶゲート 阻害物質分解、実を大きく 毎日新聞2025/4/9
- ・種子に栄養運ぶ“ゲート”発見 コメ肥大期待 笠原竜四郎名古屋大学生物機能開発利用研究センター特任准教授 中部経済2025/4/9
- ・亀山直央亀山建設社長が名古屋大学で博士号取得 岐阜新聞2025/4/10
- ・植物研究助成24件を選出 市村清新技術財団 笠原竜四郎名古屋大学生物機能開発利用研究センター特任准教授 日刊工業2025/4/24
- ・もーやっこ 柔軟なアナログ(農学部2年 倉橋怜太郎さん) 中日新聞2025/4/28
- ・接ぎ木に「自食作用(オートファジー)」関与 細胞内リサイクル 広がる用途 京大・名大研究グループ発見 中日新聞2025/5/13
- ・手摘み 名大生らお手伝い 美濃白川茶 読売新聞2025/5/16
- ・ケヤキ製材 科学で見極める 関・亀山建設の社長 名大院で農学博士号 反り、割れの原因データ化し指標 中日新聞2025/5/19
- ・遺伝子「季節のリズム」刻む アカゲザルから「働き」解明 名大など薬応用に期待 インフルや肺炎 冬に流行するワケはー 毎日新聞2025/5/20
- ・万博の腸内検査に熱視線 検査キット開発のヘルスケアシステムズ 開幕1か月で1万4千件申込 中部経済2025/5/21
- ・デンキウナギの未分化細胞「強力発電」解明に道 名大飯田敦夫助教 科学新聞2025/5/30
- ・肥満予防のポイント 朝食抜かず規則正しく活動的な生活 名大小田裕昭准教授 朝日新聞2025/6/2
- ・MICE アンバサダーに 東村名大名誉教授を任命 毎日新聞2025/6/4
- ・受験生のための書店 大学生開店 名大農学部倉橋怜太郎さん 読売新聞2025/6/4
- ・国際会議の誘致役に東村名大名誉教授 MICE アンバサダー任命 中日新聞2025/6/8
- ・万博で気軽に腸内検査 食事や生活習慣助言 名大発ベンチャーヘルスケアシステムズ 読売新聞2025/6/10
- ・池のほとりでお点前披露 鶴舞公園茶会に地元高大生ら 名大茶道部堀場陸斗さん 中日新聞2025/6/8
- ・第78回中日文化賞受賞者スピーチ 名大西川博嘉教授「がん撲滅へさらに研究」、吉村崇さん「科学や文化発展に貢献」 中日新聞2025/6/14
- ・体外診断薬開発 韓社と共同研究 名大スタートアップ iBody 中野秀雄教授 日刊工業2025/6/19
- ・免疫検査キットを共同開発 名大発ベンチャー ヘルスケアシステムズ キリン HD・ヘルスサイエンス研と 26年に提供開始へ 中部経済新聞2025/7/1
- ・「名大サカナ祭り」楽しく解説 研究者「押し珍魚」 中日新聞2025/7/26
- ・起業のチカラ 新規事業に大学の知恵 作り出す姿勢 はぐくむ講座 読売新聞2025/7/29
- ・冬の病気リスク 遺伝子が影響か 季節で変わる働き サルで調査 名大教授らチーム 中日新聞2025/7/29
- ・ステーションAiでイベント ヘルスケアシステムズ スタメンと共催 中部経済2025/8/1
- ・多様な観点「伸びしろ」に 名大・東村博子名誉教授 毎日新聞2025/8/18
- ・森のガイドをしている 横山昌太郎さん「森と人間社会は似ている」名大大学院卒 中部経済2025/8/18
- ・わが社の技術開発「株式会社ヘルスケアシステムズ」名大発ベンチャー 中部経済2025/8/27
- ・博士課程5人に赤崎学生奨励賞 名大で授与式 中日新聞2025/9/6
- ・[インタビュー] ヘルスケアで大阪万博協賛 大学発ベンチャー社長 滝本陽介さん 中日新聞2025/10/1
- ・[万博考 レガシーを問う] データ基に個別医療 名古屋大発ベンチャー「ヘルスケアシステムズ」、万博の大阪ヘルスケアパビリオンにて実施 読売新聞2025/10/4
- ・[TOKAI 最前線] 万博で収穫 未来の技術 気軽に体質検査 ビジネス化 名大発のベンチャー 朝日新聞2025/10/5
- ・たんぱく質 微生物で効率生産 翻訳促進ペプチド解明 名大など 日刊工業新聞2025/11/11
- ・名古屋大学などの研究グループ タンパク質合成に新技術 生産効率向上 3年後めどに事業化 中部経済新聞2025/11/22
- ・開花時期を制御する細胞 葉脈から単離 特徴を詳細解明 名大など 科学新聞2025/11/28
- ・[大学インフォーマーシャル] 名古屋大学「コモの市 #02」広告 朝日新聞2025/12/5
- ・「コモの市 #02」開催 共創を体感する場に 東海国立大学機構が20日 中部経済新聞2025/12/8

同窓会寄付者一覧

(2025.1.1～2025.12.31)

一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会に対し以下の方々より寄付金をいただきました。ありがとうございました。(敬称略)

浅居 湧登	綾井 宜男	石川 靖文	石堂 圭太	伊藤 憲一	伊藤 博治
井上 忠彦	植村 幸彦	大島 光昭	大橋 治陸	大橋(金沢) 祐子	岡村 柚希
岡本 達之	岡本 譲	尾坂知江子	小野田 顯正	神作 宜男	春日井 治
葛原 弘毅	神谷 克巳	亀井 達雄	岸 麻梨菜	鬼頭 正宣	栗本 重夫
小池 孝良	佐々 武史	佐藤 和夫	佐藤 隆彦	佐藤 隆英	重松 武
柴田 和憲	生源寺 眞一	杉田 敬一	鈴木 快征	鈴木 環希	鈴木 春音
鈴木 善彦	鈴木 奏仁	関 稔	滝本 愛世	竹内 公男	舘本 勲武
多和田悦嗣	寺島 典二	常田 直希	鳥居 浩	長坂 有紗	長坂 伊純
中村 友輔	中屋 愛	成瀬 和也	二井 柊真	西嶋 佳子	西村 弘行
野田(山田)ひと美		野原 葵	林 幸正	平野 翔紀	福井 敏夫
堀江 祥允	牧田 雄介	松尾 寛汰	松田 貞夫	松本 涼平	三浦 則夫
水上(村上)優子	水野 咲	水野 修一	三宅 大浄	山木 昭平	山田 智重
山本 義典	吉野 明道	渡邊 智子	他 匿名1名		

以上、75名の皆様

全学同窓会だより

名古屋大学が発展していくためには、大学と同窓会の緊密な連携が必要とされており、大学と同窓会は連携して社会に一層の情報公開を行い、社会から種々のニーズをくみ上げる必要があります。全学同窓会は部局同窓会と連携しながら卒業生、学生、教職員の交流の場を提供し、名古屋大学全体の種々の活動に関する情報を発信しています。農学部からも3名の全学同窓会幹事（稲垣哲也、本道栄一、青木弾）が参画しました。全学同窓会は2025年度、以下の活動を行いましたのでご報告いたします。

1) 同窓生名簿の整備

- 大学の運営する「卒業生等名簿管理システム」運営への協力
- 大学および各部局同窓会との連携強化
- 名簿の活用

2) 財政基盤整備

- 支援会員の募集、支援会費自動引落利用者の拡充
- 同窓会カードの普及、及びカード優待店舗の開拓
- 活動協力金の取り組み

3) 拠点形成

- 関東支部、遠州会、関西支部、岐阜支部との連携・支援
- 愛知支部または名古屋支部の設立検討
- 海外支部との連携・支援、新たな海外支部の設立検討
 - ・新たな支部としてシンガポール支部、エジプト支部を設立
 - ・新たな支部設立の検討をする（スリランカ）
 - ・各支部（韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、台湾、ラオス、ミャンマー、インドネシア、フィリピン、マレーシア、米国）との連携強化

4) 全学同窓会活動の運営基盤整備

- 評議員会の開催
- 部局同窓会との連携強化
 - ・名古屋大学同窓会サミットの開催
- 大学との連携強化
 - ・連絡会議の開催
- 委員会活動の機能強化
- 講演会・夕食会の実施
- クラブ活動同窓会、企業内同窓会等との連携

5) 学生支援

- 名大祭パンフレットへの広告掲載
- 寄附講義「キャリア形成論」の支援
- 学生活動支援
- 入学式、卒業式への全学同窓会からの来賓出席、祝辞
- 就職支援活動の検討
- 卒業記念のタイムカプセルへの支援

6) 大学支援

- 名古屋大学基金活動の支援
- ホームカミングデイの共催、支援
- 国際交流貢献顕彰受賞者レセプションの共催、支援
- 大学支援事業の実施
- 国際交流活動の支援
- シンポジウム、フォーラムなどの後援
- アカデミックガウン購入の支援

7) 広報活動

- 大学と連携し、全会員に情報を発信
- 全学同窓会 Newsletter の発行
- 大学発行メルマガからの情報発信
- ホームページ、フェイスブックの活用
- 卒業生・修了生への全学同窓会活動の紹介

一般社団法人名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会会費規則

第1条 (目的)

この規則は、この法人の定款第8条の規定に基づき、会員が支払う会費等に関する必要事項を定める。

第2条 (会費)

会員は、定款第6条に定める種別に従って次の会費を納めなければならない。会費には会誌の購読料が含まれるものとする。

- (1) 正会員 永久会員会費2万円
ただし平成11年度以前に卒業の正会員は5年ごとに5000円
(平成11年度以前卒業の正会員も永久会員会費2万円を支払うことで永久会員とする)
- (2) 学生会員 永久会員会費2万円
ただしいったん永久会員となった場合、
卒業後そのまま正会員(永久会員)に移行する。
- (3) 特別会員・・・会費徴収なし
- (4) 名誉会員・・・会費徴収なし
- (5) 特例会員・・・会費徴収なし

第3条 (規則の変更)

この規則は、社員総会の議決によって変更することができる。

附則

- 1 この規則は、2022年8月1日より実施する。

事務局だより

事務局では名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会会員録データの改訂を行っています。転居および転勤の際は、同窓会事務局 (dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp) までご連絡ください。今後も会員の皆様からのご質問・ご要望にお応えして参りたいと考えております。ご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

同窓会したいなあ
と思ったら

Reフレンズイメージキャラクター
ともーる

同窓会幹事代行

『Reフレンズ』

★住所録不要。案内状発送・出欠管理はお任せください。

お問い合わせ 株式会社 サラト Reフレンズ専用
TEL 0120-953-070 株式会社 サラト
〒670-0948 兵庫県姫路市北条宮の町172
受付時間 月～金 9:30～12:00/13:00～17:00 TEL 079-284-1380 FAX 079-284-0904



 印刷業から情報デザイン業へ

Info. + Design

長年培った表現技術を活かし、「印刷業」から「情報デザイン業」へと進化していきます。

販促支援サービス	マニュアルサービス
P&Dサービス	教育出版支援サービス

株式会社 **クイツス** <http://www.kwix.co.jp>

■本 社 〒448-0025 愛知県刈谷市幸町2-2
TEL 0566-24-5511 FAX 0566-26-0200
代表取締役社長 岡本 泰

農学部・生命農学研究科同窓会事務局では、広告の募集をしております。本会報の発行部数は、現在約10,000部で、本学農学部関係者に配布されています。会社の広告、同窓会の通知などにご利用下さい。詳しくは、同窓会事務局まで。

個人情報の取り扱いについて

名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会では個人情報の正確で適切な管理に万全を期するため、会員データの管理を株式会社サラトへ委託しております。株式会社サラトは愛知県内約80校全国約1,500校の同窓会で会員データ管理を手がけ個人情報保護法に最も精通したプライバシーマーク取得企業です。なお、サラトは得られた個人情報を責任を持って厳重に管理し、個人情報を第三者に開示または提供しないことについて、名古屋大学農学部・生命農学研究科同窓会とサラトとの間で契約を取り交わしております。